

真鶴学園風雲録

Scenario #3. "Naval holiday"

一. そしてまた陽は昇るの事

4月7日、始業式。4月8日、入学式。この「儀式」が終わると、生徒たちにとっての1学期は本格的に始動する。

放課後ともなれば各クラブが血眼になって新入部員を獲得しようと躍起になる。多くの部員を擁する事は、即ち学校内での発言力を増す事を意味する。また零細クラブにとっては一人でも多く新入生を獲得しないことには死活問題に関わる。従って勧誘活動が正式に解禁されるのは入学式以降であるが、ポン引きまがいの勧誘は昼夜を分かたず行われ、風紀委員会に検挙される者が相次ぐ訳である。解禁後もあまりに過激なパフォーマンスは取り締まり対象となるが、活動そのものが「過激」な格技系のクラブあたりはその点で有利であった。普段の練習を披露すればそれだけで人目を引くのである。しかし目立つ要因に乏しい文化系クラブは脇で指をくわえているしか無いかと云うと、そう云う訳でも無かった。管弦楽部の男子などは「部の宣伝の為」と称して文芸部、美術部とタイアップしたチンドン屋をやっており、余裕の有るクラブはこれを積極的に活用した。もっとも報酬は「ヤミ価格」で、常にかなり不評を買うのも事実である。

「物理部」と大書した幟を背に負い、一年の教室周辺を歩き回った野木坂若葉などは「平均点」レベルであった。

山形から出てきた山本九十九(中一)にとっては、これが初めての「関東」のテイストである。好奇心の赴くままにあちこちと歩き回っていたが、印象としては「何でこんなに人が多いんだ!」というのが強かった。同じ東北出身としては菅原絵馬が「有名人」の中に数えられていて会えればとも思ったがなかなかタイミングが合わず、剣道部の演舞で一度その姿を見たきりである。もっとも「精力的に」動いたかい有って、顔見知り程度は多く得ることができた。しかしクラブは「良さそうなところ」が多すぎて決めるに決められなくなってしまった。このままでは真鶴においては少数派の「帰宅部」に落ちつくのかも知れない。それはそれで、解散したとはいえ潜在的には学内最大派閥の「宇垣一家」に近くなるので有利と云えば有利なのだが...

二. 挑戦者あり

天野麗奈(高一)はSF研に入ったが、入学後いくばくもたたない内から放送委員会のしつこいぐらいのアプローチを受けて悩んでいた。確かに、彼女が選んだMFは、放送委員会の牙城である管制塔と切っても切れない関係にある。しかし相手はどうやら自分の正体を最初から知っていたらしいのだ。そのくらい、愛想が良すぎた。

おかげで彼女が腹案として持っていた「文化系同好会活性化計画」は動こうとした矢先にスクープされて目立ってしまいうし、目立ってしまえば今度は「今のままが気楽でいいよ」という零細同好会のガードが堅くなって相手にしてもらえなくなるのでいい事なしである。

だから当初から天野自身の放送委員会への印象は激悪だった。

MF自体でも隙を見ては管制塔から「放送委員会に入らない」的な勧誘放送が割り込んでくるし、油断はできなかった。もっともこの手の勧誘放送はこの時期、放送委員会以外もやっていたことではあった。あとは個々のモラルの問題である。かといって無線を切るのは危険極まりないし逃げ場なしである。

初雁さんなら、何とかなるかも知れない。かつて栗田榛名の直弟子として数々の修羅場をくぐった(という評判の)初雁に頼ろうとした彼女では有ったが現実はず甘くなかった。

初雁は常に不在だったのである。

天野はそこから一つの回答を導き出した。その場になければよいのである。

そんなわけで、気づいて以来彼女はMFでは単機飛行を心がけ、日常でもなるべく放送委員の目に留まらないように動くようになった。

知名度の方がバブリーに先行してしまった者の悲哀である。

もっとも、捨てる神あれば拾う神ありであった。橋清華(高二)は彼女自身と同様A-4で空中機動の練習に励む彼女にある時目が止まり、以来偶然を装っては仕掛けていった。一方で天野はそんな「謎のA-4」をうざったく思ってもいたのだが、どうやらあの「しつこい」放送委員とは別物そうだとはいっていた。

三. I shall over come.

坂井法子は7日朝、教室に入って自らの目を疑った。宇垣がいたのだ。先着の他生徒たちも、じろじろとは見ないがやはり意識はしているようだ。原則としてクラス替えは無いに等しいから、その中で宇垣はどこか居辛そうでもあった。

あの噂、本当だったんだ。

控え目な会釈を送りながら坂井は思った。内進生は、留年すると理由の如何を問わず外進生のクラスに編入される。滅多にある事ではないが、それは即ち学校内での扱いが一ランク落ちることを意味する。(私学の常で、内進生と外進生の差別は気づかない所で特に激しい)彼女は文Sであったから、言うなればエリートコースから完全に脱落したに等しい。教職員からは頼りにされても好かれはしない彼女である、これから卒業まで、有形無形の差別を受けて行きたらう。知っている者がそばにいる安心感と同時に、言い様のない寂寥感が彼女を包んだ。

四. Touch and go!

菅原絵馬もついに3年生になった。後は受験が控えるばかりだ。文系に不安のある彼は休みには図書館へ行き、初雁と互いを補いながら本格的な受験対策に着手した。一方で来るべき対抗戦の為の練習にも前以上に力を入れ始め、新たな旗艦、アイオワ級戦艦(男子部最大戦艦)の能力もさることながら、艦隊砲戦なら随一の評判を得るまでになった。無闇にアウトレンジに走らず、より命中率が期待できる所まで飛び込んで行って必殺の一撃を叩き込み、素早く逃げる戦法は、剣道をたしなむ彼ならではの物だろう。彼のハードスケジュールは、「本家」初雁を凌ぐほどの「月月火水木金金」であった。

初雁との会話はずっと前から多岐に渡るようになっていたが、しかし最近は碇先生についての疑問が増えるようになっていた。彼とて剣道部の新しいコーチ、師範だから気にならない筈はなかったが、しかし「そんなに凄いのかな」という疑問も常について回る。積極的にその話題を持ち出すのは、常に初雁だった。

翌日の部活中、彼はついに、碇先生に「手合わせ」を頼み込んだ。碇先生は相変わらず暢気な調子で、それを受け入れた。が、その態度は菅原を早くも警戒させるに十分だった。怪しい。普通の先生なら思い上がりも甚だしいと一喝されるのがオチである。それをこうも易々と受け入れるのは、思い切り負かして思い知

らせるつもりか、それとも本当に好意的なのか、あるいは何も知らないのか。

道場は緊張に包まれた。今まで師範代として仏壇の下に座っているだけだった碇先生が、遂に竹刀を手にしたのだ。一礼を交わして蹲踞する二人を、部員達は固唾を飲んで見守った。立ち上がり、竹刀を構える。

蹲踞した辺りから、菅原の疑念はいよいよ強くなった。おかしい。何の「気」も感じられない。

しまった。彼がそう思ったのと、「始め」の合図が下がったのが、ほとんど同じだった。

が。

碇先生は動かない。竹刀を中段に構えたまま、びくともしない。菅原は開始と同時に打ち込みを警戒して八相に構えたが、そこから金縛りに遭った様に身動きが取れなくなった。動いたら、やられる。今まで幾つかの試練を越えて来たその経験が、彼に命令していた。周囲を囲む部員達がざわめき始めたが、それも菅原の耳には入らない。

実際は数秒だったろうが、彼自身には数時間にも思える時間が瞬く間に過ぎた。どうしよう。彼は段々焦りを覚え始めた。このまま何もせず打ち込まれたのでは、手合わせを申し込んだカッコがつかない。かと言って一発も打ち込んでいない現状では、このまま時間切れになるのも負けに等しい。ままよ。彼は気合一

発喚声を上げ、大上段に思い切って振りかぶり、碇先生の懐へ突っ込んだ。

一瞬だが、面越しに彼女の微笑がのぞく。確かに、見覚えの有る面構えだった。しかし懐かしいその眼付きは次の刹那に殺気を帯びる。

あ、と思った時には勝負がついていた。彼の竹刀が彼女に絡め取られて場外に転がる。あ痛いの感覚が出るより先に鋭い胴払いが襲いかかり、彼は肩から板張りの上へしたたかに叩きつけられた。菅原が道場のよく磨き上げられた床を滑り終えるのと並行して、碇先生の折れた竹刀の切っ先が観衆の中に飛び込む。間違いない。真剣なら上下真二つだった。審判も呆気に取られてただ両者を見比べているだけだ。

「判定！」

鋭い声が場内に響いた。慌てて審判も「一本、それまで！」とは言ったものの、動揺は隠せない様だ。

碇先生が代わりの竹刀を受け取る間、菅原は深く考え込まずにいらなかった。面の奥に見えた微笑みは、見紛う事無き巴御前のそれである。しかし御前は既に雪風と共に亡いはずだ。... 第一、あの時御前は既に幽霊だ。先生は確かに謎に満ちあふれた人物だ。しかし、だからと言って幽霊だなんて、そんな事が有って許されるか？

菅原は混乱を覚えながら二本目に臨んだ。

二本目は有って無い様な物だった。

菅原が一つ覚えで大上段に振りかぶる。乾いた音が道場にこだまする。瞬間、周囲が呆気に取られる。菅原の一本。まるで打ち込みの模範演技の様に、碇先生は微動だにしない。

この勝負、負けた。菅原は直感した。いくら何でも、一本目にあれだけの事をしておいて、振りかぶられてもびくともしないのはおかしい。わざと華を持たせたに違いない。場外に出て一息入れる彼女は、面の奥でどんな表情をしているのだろう。彼は得体の知れない相手と四つに組んだ様な無気味さを覚えた。

一対一。道場の空気は否応なく高揚している。三本目前のしばしの休憩時、彼の脳裏を「一度見切られた技は二度通用しない」と誰かの声が過る。

いくら何でも馬鹿の一つ覚えの様に大上段からの面一本では、師範代でなくとも見切る必要は無い。しかし小手先の策を弄する様な余裕が無いのも判り切っている。考えろ、絵馬。彼は自分にそう言い聞かせた。初雁さんの友達、... そうだ、坂井さんか、彼女がいつか言っていた。撃墜王坂井三郎は、地味な戦法で相手のミスを誘い、着実にスコアを伸ばし、生き残った。「華麗な技」は逆に命取りだと...

生き残る事だ。どんなに強くても相手は人間、いつか必ずミスをする。時間を稼ぎ、相手のミスを見抜くしかない。こちらから無理に仕掛ける事は無い。たとえ幽霊だろうと元は人間だ。どこかに必ずチャンスがある。

不思議と落ち着いた気分で、彼は三本目に臨んだ。始めの合図が下った次の瞬間先生が突っ込んで来て、両者は八相のまま鏝競りあいとなったが、それでも彼の動揺は不思議と余り強い物ではなかった。これでいいのだ。

不意に先生が口を開く。静かで、木管楽器の様な、それでいて厳かな声。

「久しぶりですね」

間違いない。巴御前である。

「私はどうの昔に、人を殺める事を捨てたはずでした」

いきなり何を言い出すんだ。

「それが先程は取り乱して、つい」

それである胸払い。菅原は背筋が凍る思いだった。今でも脇腹はひどく痛む。

「私もまだ修行が足りないようです。構いません。警策のつもりでお入れなさい。どこへなりと」

深呼吸してよく相手の面をのぞきこむと、御前の、否、先生の目にはなぜか涙すら浮かんでいる。

「鬼の目にも涙」

どうでもいい事がフラッシュの様に彼の頭を過るが、すぐに振り捨てた。どうもいけない。誰の影響だろう？

「来なさい！」

道場全体によく通る鋭い声が彼の耳を打った。

えいくそ。菅原はふっきれた。

半歩退がり、反動で踏み込みながら鳩尾に向け、今まで自分でやった事はない、鋭い突きを打つ。先生は声にならない

いうめき声を吐き出し、踏みとどまった。

二対一。しかし一本目で勝負はついてた。それは観衆よりも、菅原本人が最もよく認める「事実」であった。

道場の入り口にはいつの間にか初雁がいて、どうやら一部始終を見ていたらしい。彼が行くと、彼女は控え目な口調で言った。

「やっぱり？」

彼には力無くうなずくしかできなかった。しかしそれで全て通じた。

「...ごめん」

彼女は目を伏せて、ずっとその場を去った。

五. Over the TOP!

南部沙紀は忍術研の部室で「居候」をちらと横目を見た。その手の中にはある物が既に5割方形を為している。

視線を転じると「ハルク・ホーガン」「アブドラ・ザ・ブッチャー」と黒マジックで少し歪んで書き込まれたボール紙の大きな箱が、備品棚の上に鎮座している。下手に触ると胡椒の目潰しが滝の様に降り注ぐ仕掛けとは、それと知らなければ気が付かない。

居候...野木坂である。

「行ける行ける。この調子なら5ヶなんか軽い。楽しい事になるぞー...」

物もでかいが話もでかい。このことは女子部MAの対抗戦略に必要な不可欠の「極秘作戦」なのだ。

南部が彼女の「アイデア」をMAの「上」...今年から「作戦委員会」の名を持つに至った...に持ち掛けた次の瞬間、その計画には「ハンセン計画」の名が付き、女子部MAの「切り札」として採用されたのである。計画の存在自体が極秘とされ、委員会、南部、野木坂には厳重な口止めがなされた。

「必要物資」の調達には困らなかった。完成品はさすがに無かったが、マニア向けのキットが発売されていたのだ。委員会は真鶴の模型店に有った、在庫分も含めて5ヶ全て公費で買い占め、制作を発案者の野木坂に委ねたのだった。この時副産物として、1ヶだけ予定に無い、他と違う物が含まれていたのだが、彼女は嬉々としてそれを受け入れた。

趣味と合致したのである。

一方、初雁は交通研の会長として、奇妙な「依頼」に困惑していた。

MA用エリアの男子部側に、いきなりひどく大規模な操車場を作るように頼まれたのだ。それも広軌...否、日本で云う広軌であって、国際標準軌だ。

何すんのかな。始めに話を聞いた時には訳が判らなかつた。今でもピンと来ない。一応「円滑な補給の為」という説明で納得はしたが、どうも今一つ飲み込めないのは確かだった。

六. 君を忘れない

坂井法子は始業式当日の宇垣の姿を見て以来、それまで以上に深く考え込まずにはいられなかった。如月は、山城は、死んだ...何の為に?誰の為に?何故死ななければならなかったの?私は生きている...何故?

しかし彼女は表面上では元気を装っていた。少くとも自分はそのつもりだった。しかしどう頑張っても、人間その内面をそう完璧に隠せるものではない。陰々鬱々とした彼女の周囲からは、徐々に人影が薄れていった。初雁さえ、最近では坂井を避け始めているように思えた。

孤立感が深まり、更に鬱になる。悪循環のはけ口を坂井は「空」にしか見出し得なかった。

紆余曲折があつて彼女は再びF-4EJを駆るようになっていた。そして自ら後輩の指導にあたっていた。F-4。はるなが「立场上」F-15乗っていないながら、溺愛していた機体である。後席手はいなかった。自分から乗せなかったのが多分今の彼女の後席手を努めたがる者などいなかったろう。

MFのモラルは、落ちる所まで落ちていた。

スター不在。

目標が無い事ほどやる気をなくす事はない。在校生で新入生を希望を集めるような技量を持つ者は稀だったし、その稀な「テクニシャン」は他人に技を伝授するほどの自信も度量も無かつた。言つて

みればはるながいたことの弊害でもあったのだが...

何にせよ今の坂井には、空が全てと言って良かった。地上でじっとしていたら、「事件」のことで頭が一杯になってしまう。空にいればそんな事は考えなくていい。

それに彼女には、「はるなを越える」という至上命題があった。

今年の対抗戦は連休明け。それまでには何としても、強くなってやる。

七. 学校の花子さん

人生何度かは「止せば良かった」と思う事が有る。その時の野木坂も丁度それに当たったかも知れない。部屋を整理していてふと見つけたラジオのような機械。思い起こして見れば、あまり用を為さなかった短波盗聴機である。すぐに捨ててしまえばそれまでだったかも知れない。しかし彼女は、気が付くと既にスイッチを入れていた。発信機は3月まで如月の部屋だった、そして今は空室になっている所のドアに据え付けられたままで、本来なら何も聞こえない筈だ。

しかし。

聞こえたのである。モダチヨキが。一瞬野木坂は目をむき仰げ返った。

そんな馬鹿な。無人の部屋でそんな事が有り得る筈はない。わざわざ誰もいな

い部屋まで出かけてモダチヨキ聞いているような暗い奴が居るのだろうか？居ても立ってもいられず、彼女は問題の部屋にすっ飛んで行った。

部屋は無人であった。近くで音楽が鳴っている風も無い。何だったのだろうか？しかし、彼女がその場を後にしようとしたその時。紛れも無い、モダチヨキのあの脳天気にも明るいフレーズが、背後から聞こえて来た。振り返ればまた何も聞こえない。

薄気味が悪くなって、彼女は何物にも目をくれず自分の部屋へ飛んで帰り、なお音楽を奏で続ける盗聴機を叩き壊して廃棄した。

事態は静かに推移している。

To be Continued...

校長日誌

最近光文社の文庫が見つかったので「大空のサムライ」シリーズ3冊をたて続けに読みました。いやあ、怒涛の三番煎じにはさすがに閉口しましたが¹、その事はちょっとタンマして思ったのは「もっと早く読んでりゃなあ」と言う事でした。この世界長いのには恥ずかしい限りですが、実はまともな形で読んでなかったんですよ、坂井三郎の著作。(^_^)小学校の頃に図書室で子供向けにリライトされたもの²は読んでいたのですが、仮定に過ぎませんが、読んでりゃASにせよ何にせよ、空戦シーンはもっ

¹ どう云う事かは読めは判る。

² 今思うとそうだと思う、ガダルカナル攻撃の後片目になってしまったエピソードだけは

とまともな物になっていた事でありましょう。(T_T)誰だったか東大の偉い先生が書いた「撃墜王との対談」でさえ大学上がって暫くして、蔵書に有ったの見つけた程だし。そんな程度でPBM始めたってんだから無鉄砲にも程が有ると思う今日この頃。³

本と云えば、新紀元社がいい本を出しています。「連合艦隊艦船ガイド」「帝国陸海軍軍用機ガイド」「ドイツ第三帝国軍用機ガイド」の三冊がそれで、このシリーズは他にも有るのですが特にこの三冊はお薦めです。値段はお約束通り少し張って平均3000円弱ですが、コストパフォーマンスを考えると「航空ファン別冊」とか「世界の艦船別冊」と互角かその上を行くと思われれます。マイナー機、艦まで手を抜かないでちゃんとまともなイラストがついていると云う、正に涙ものの逸品。ただ取返して難癖を付けると、「連合艦隊」には給糧艦「間宮」⁴が無く、「第三帝国」は解説が少々メーカーびいき⁵、「陸海軍機」には陸攻「深山」⁶や練習機「白菊」に対潜哨戒機「東海」⁷がない等不満も有るのですが...何にせよこのとこ仮想物も含め、粗製濫造気味だった二次大戦本の中であって稀に見る「好著」である、とし

ておきましょう。素人にとって資料価値は極めて大。

ところで巷間ではWindows95の話題にあふれてますね...私も気にはしてませんが余り積極的になれません。ファイル関係のシステムが変更になって、今まで使ってたユーティリティの多くが事実上使用不能⁸になるし。多分現行のOSには自発的には入れないでしょう。現在ノート再装備計画が進行中で⁹、DOS/V¹⁰を買う予定なのでそっちは95でシステムを組むでしょうけど。

さて、今回はGW明けから5月末までです。のつけから男女対抗戦が有ります。また、末には中間試験が有ります。多分アクションで直接試験の描写が入る事はないと思いますが、アクションの絡みで必要があればその限りにあらず。「フレキシブルワイヤー」なアクションをお待ちしています。

締め切りは1月8日。ただし年末は例によって郵便事情が大混乱しますから、事故を防ぐ為にも適当に早めに出し出した方がいいでしょう。

では、今度こそこんなに間が空かないよう釈尊に祈りつつ。

合掌低頭

³ 妙に印象が強いので。
⁴ そういやようやく「茶電改のタカ」も自分で買いました、愛蔵版を...
⁵ 「軍艦長門の生涯」にその記述が有るのだが過去一度も他の史料に見た事がない、謎の艦である。帝国海軍空前にして絶後の補給専務艦だったのだが。
⁶ 確かに当時不遇なメーカーは多かったけどさあ...
⁷ 一応日本初の四発陸上機なんだから、少しくらい載せてって罰は当たらないはず。何でもみんなそう糞子扱いですかなあ。「轟」ではおいしい機体だし、種機のDC-4Eも個人的には好きなんだけど。
⁸ 二機とも存在は確認されているが、「間宮」程でないにせよ資料が異常に少ない...
⁹ 動くけどとても楽しいことになる。どう楽しいかは楽しすぎて書けない。
¹⁰ NARは生活費工面の為、後輩に払い下げた。
"牛"かDEC、IBM純正もそう悪くない。CD-ROM内蔵機種が手に入ればなお可。

穴埋め、もしくは後片付け

厚木の遠藤さんから指摘があってこちらでも慌てたのですが、宇垣のダイニング・メッセージ¹¹、「米内を殺せ」の謎解きを。

「米内」はそれ自身が特定の人物を指す訳ではありません。即ち、仮に学校内に「米内」という人物がいたとしても、関係はありません。「米内」とは開戦当時の海軍大臣、米内光政を意味します。条約派の筆頭で天皇の信任も篤く、また海軍内部にもシンパが多かった人物です。もちろん山本五十六元帥とも親交が深く、元帥（当時大将）が連合艦隊司令長官に就いたのは、平和派の彼をテロで失うことを恐れて艦隊に匿うための、大臣の「作戦」であったとも云われます。また終戦工作に奔走した人物としても有名です。しかしそれだけに、特に陸軍からは猛烈な反感を買っていたのは想像に難くなく、また事実でした。戦前に米内内閣が陸軍の反対で成立しなかったことは日本近代史における重要事件として有名ですし、有形無形の嫌がらせは右翼をも巻き込んで雨のように大臣の元に降り注いでいました。「君側の奸、米内を殺せ」は右翼の代表的なスローガンでさえありました。しかしそれでも彼は長きにわたって海軍大臣の席に留まり、政策面から海軍をバックアップし続けたのです。その功罪はともかくとして、海軍内で米内大臣の存在は実に巨大でした。

さて謎解きに入ります。宇垣が「米内」を殺せと告げた、その「米内」とは、栗田艦隊で榛名の強い信頼が寄せられている人物を示します。この中で宇垣は当然除外されます。榛名もこの構図で行くとトップですから対象外でしょう。残るは南雲、山城、如月。三者三様に「臭い」のですが、うち南雲と山城はそれぞれの副官ですから、「米内」の名が冠されるほどではありません。

残る如月が正解。如月の情報ネットワークは侮りがたいものがあり、誰がシンパで誰がそうでないか判ったものではありません。もしそこにいるのが如月のシンパだったとしたら、... 下手をすればとどめを刺されるかもしれません。従って宇垣としては、直接に彼女の名を使うことには抵抗があったのです。それでも今まで信頼してきた「仲間」にいきなり裏切られると云う事態に直面し、彼女をして「殺せ」と言わせたのです。

実はこの時如月と宇垣との間で「雪風」の継承云々の話があって、如月は宇垣が自分の方針¹²に同意しないと見るや、口封じの為に¹³彼女を消しにかかっていたのでした。

これは本来原作の連載でフォローするはずだったのですが、結局成立せず、またその後これを絡めなくても話が進んだので放置されたままになっていたのです。岩屋口さん、やっぱりブルースカイクイズですかね、これって。〔_`;)〕

11 死んでないって(´_`;))
12 雪風をあくまでも秘匿するってやつ。
13 でないと自分の立場が非常に危ないものになる。

And Now. . .

一. 天狗の落とし文

スイマセン「最上級」を「さいじょうきゅう」と呼んでしまいました。本当は「もがみきゅう」なんですよ？しかしよくラプリーエンゼルの大ききなんて覚えてたな。

編：何のこたないです、書いてるこっちも辞書登録が面倒なので当時は「さいじょうきゅう」で変換してました。

ちなみに「ラプリーエンゼル」の大ききは第一巻の冒頭で書かれているだけです。しかしよく覚えてるな、そんな事。

二. Killy Takara Forever.

「キリー・タカラへのラブレター〜」なんか懐かしいですね、残念(?)ながらぼくも応募はしませんでした。

編：しかしまあ今もってりなさん便せんて手紙を書いて下さる心優しい方が多いことは¹⁴私にとって慶祝すべき、あるいは恐るべき事態なのであります。というのも「俺だけじゃない」という同族意識の陰で「ポスト・りなさん」がいないと云うことは今後の同人界がゆゆしき事態になりつつあるという... オーバーか、これは。¹⁵

14 お見せできないのが残念です
15 いやでも本当だぞ、いつ何が起るかわからんのだから。

三. あ〜んあやんなっちゃった、あ〜んあおどろいた

牧信二くらい僕も知ってますって事で更に+1。

編：実は牧伸二なのでした。笑点で川崎ネタやって一時期ホされた事があるのをチミたちは知っているか？あれ以来牧先生は変わってしまったわ。... 以前は茶色のジャケットがトレードマークだったのに、最近はどうも派手派手しくなってる。ああ、牧伸二が壊れていく(´_`;))

四. 真鶴

「いなば」ですか〜？ボクも名前しか知りません。確か「出雲」の前でしたよね。そして「紀伊・いなば」なんて編成もあったんですよ。うっ、何でこんな事まで知ってんだろ。

編：でもって「さくら」と編成共用してる関係もあって「紀伊」より「いなば」の方が車両が多かったりとか、「いなば」の少し後に「紀伊」もなくなっちゃったとか、しまいには「出雲」も廃止されたたんでしたっけ？呪われてるな、あの方面は。やっぱ神様のとこへ寝て行くてえのは罰当たりなんだろか。(´_`;))

以上、小田原の遠藤さんからの私信よりお届けしました。